

研究機関名：東北大学

1.受付番号	2016-004 (2017年1月10日東北大学川内南地区倫理審査委員会承認)
2.研究課題名	終末期における意思疎通がとりづらいがん患者と家族の望ましいコミュニケーションに関する研究
3.研究期間	平成29年2月(倫理委員会承認後)～平成30年3月31日
4.研究の概要	<p>意義・目的</p> <p>Good death 研究における日本の特徴として「家族との良い関係」があり、望ましい死、その過程を支えることは緩和ケアの重要な目的の1つである。がん患者の終末期の特徴には、死亡前の1、2ヶ月に急速に全般的な機能の低下がある。身体的全般的な機能が低下するため、患者は徐々に意思疎通がとりづらい状況になっていく時期である。終末期はがん患者にとって苦痛を感じる時期でもあるが、家族にとっても苦痛を感じる時期でもあると先行研究で述べられている。その一方で、終末期の過ごし方が、患者と死別後の家族の適応に影響することを示唆する先行研究もある。つまり、医療者が援助するにあたり、目の前の患者と家族の苦痛を軽減することと家族の死別後の適応への影響も考慮する必要があるといえる。</p> <p>実際に医療者の中でも看護師は、家族ケアで患者と家族の関係のコミュニケーションを仲介する援助を行っていると報告している(奥、2006)。しかし、状況によってはコミュニケーションの仲介は十分とはいえない現状がある。これまでの研究では、意思疎通の可能な患者と家族の相互作用の研究はされてきた(渡邊、2015)が、終末期における、意思疎通がとりづらい状態の患者と家族がどのようにコミュニケーションをとっており、それに対して医療者がどのように援助を行っているかについては十分に検討されているとは言い難い。また、医療者の視点と遺族の視点では、実際のコミュニケーション・医療者からの援助の考え方が異なることが想定されるため、両方の視点を明らかにする必要があるといえる。</p> <p>本研究では、遺族の視点から終末期における意思疎通がとりづらいがん患者と家族の望ましいコミュニケーションについて明らかにすることを目的とする。本研究では、意思疎通のとりづらい患者の状態を、言語を用いたコミュニケーションのとりづらいつれな状態と定義する。そして、患者の意思疎通の阻害要因として、身体症状と精神症状の2つの点から、終末期における言語を用いたコミュニケーションがとりづらい状態の患者と家族のコミュニケーションについて検討する。</p> <p>方法</p> <p>家族ががんで看取った経験のある遺族5名程度を対象とする。研究対象者は、同テーマに関してH28年度に実施した医療者を対象としたインタビュー調査で協力を得られた医師・看護師・心理士からの紹介及び、宮城県がん総合支援センターから紹介により協力を募る。</p> <p>研究参加者の背景情報に関する質問紙への回答を求めた後、60～90分程度の半構造化面接を行う。インタビューでは、意思疎通のとりづらい状態の患者と家族のコミュニケーションに関して、(1)実際に家族が患者に行ったコミュニケーションの内容、(2)患者への関わり方に関して医療者から家族が受けた援助の内容、(3)望ましいと思われる患者とのコミュニケーションの取り方、及び医療者からの援助の方法について尋ねる。インタビュー実施場所は、周囲に音が漏れない、プライバシーの保たれる静かな場所とする。インタビュー内容は研究参加者の許可を得られた場合には、ICレコーダーを用いて記録する。</p> <p>問い合わせ・苦情等の窓口</p> <p>東北大学大学院 教育学研究科 総合教育科学専攻 臨床心理研究コース 電話番号：022-795-6140 東北大学川内南地区「人を対象とした医学系研究」 倫理審査委員会事務局 (022-795-6003)</p>